

桑原 記

音樂俱樂部記事

露すべき意見なり考へなりの所有者はかくも少いものだらうか？否、自分は澤山ある事を信じて疑はない。果して然らば彼等にはその意見なり考へなりを堂々演壇に立つて披瀝すべき勇氣が欠けてゐなくて何であらう。或者は云ふかも知れない。『意見はあつても勇氣はあつても削られるからしやべれない』と。自分は彼に聞きたいのである。『それでは削られない様な意見はちつとも無いのか』と。削られる様な意見は彼自身の爲めにも、將又一般龍南人の爲めにもしやべらないのが利口である。唯委員は削られない程度の意見の披瀝を只管ら切望してゐる其人が雄辯か訥辯か等は敢て問題としないのである。演說部衰微の原因の因たる即ち何が龍南を無氣力にさせたかに付いては諸君等の頭にヒンと來る何物かあらう。併し『それは龍南自身である』と云ふ大きな原因があるのを見逃してはならない。

「苦しみ、苦しみとして味ひ行く者の上に幸あれかし」。

全ての人の爲に、此後の者の爲に、貴き魂の糧を分つ可く豫言者は受難の荆冠を捧げねばならぬ。眞理の愛撫者、エロスへの限り無き憧憬は、ソフィヤをかつて生命の泉を汲ましむ可く苦難の歷程を續けしめる天國へ通ずる路は荆棘の路である。されど人の手達よ、荆棘に閉ざされた闇の中から、魂の美はしき旋律が漂ひ來るではないか。是雄々しくも育ち行かんとする音樂部管絃樂團に取つての洗禮の寫繪である。

本體に對する懷疑は現象の分解研究に依つて満足される物ではない。疑ふ故に存在するコギターの根本法則、其自らは既に一つの假説ではないだらう。かくて思惟者は最後に其身を眞理の深淵に投ぜればならぬ音樂生命の客觀的把握の不可能性に對する屢々の懷疑的な煩悶は、其美しき情緒さへも憂鬱の檻に閉ぢ込めらる。併し薔薇色の夢の彼方、虹の國、甘き泉と清き流れの中に棲息する「瀕死の白鳥」を思ふ時、誰か音樂を

否定し得よう。音樂は、まことに宗教が與へ得ざる物、哲學が解き得ざる物、最もイデー的にして最も渴求せらるゝ物を與へて呉れる。アプリオリのアプリオリ、是を音樂は囁く。かくて客觀的にも概念的にも把握し得る物以上に、藝術の内面に躍動する美の生命其物の中に、我々は自らの生命をヒナインレーベンし、又は直接其中にアインフアーレンしなければならぬ。美しき又は崇高なる自然印象の美的享樂は我々が自然に魂、ベセルンを與へる事に依つて可能である。さればこそ、ソナタは銀色の綾を投ずる月光の下で永遠普遍の生命を獲得したではないか。ワグネルは人生觀の結論として「ニールンゲン」の指輪を残したと云はれて居る。我等は更に新しき世界觀の把握に向つて進む可きである。且又我々は音樂に依つて生ずる初等美的感情を弄んではならない。今や音樂の爲の音樂は既に許されず、更に進んで人生の爲社會の爲の藝術に向つて飛躍しなければならぬ。然らば王者は、遂に、贅しき衣の中にも

靈の珠を見出すであらう。

我音楽部の誕生祝である處女演奏會は大成功裡に終了した。小規模ながら管絃及びコーラスの一通りの形式は整つた。然し棘荆の路は尙續いて居る。生れ出る惱みよりも一層苦痛な育ち行く者の惱み。管絃樂完成の爲に必要な各部員の團結熱情の不足不満。だが音楽部自體に對する愚痴は止さう。其は一つのトライアルなのだ。今僕等は練獄の中にある。やがてヴァーヂャスは僕達を永遠の女神、魂の樂園の下に導いて呉れるであらう。尙音楽部は龍南文化の爲に生れたる團體であるから、龍南人諸兄の一層の御聲援を御願ひ致す次第である。

五月上旬演奏會を開く豫定であつたが練習不足、資金不足、曲目の選定難の爲、且又私自身論文草稿に時間を取られて、遂に會合練習の機會を逸した事等の爲に、開く事を得なかつた、ひとへにお詫び致します。

次期演奏會は九月下旬に開催の豫定。

本年度豫定練習曲目

- 一、組曲、胡桃割り……チャイコフス

キイ

- 二、組曲 ベーア、ギント第一……グ

リーク

- 三、序曲 アテネの廢墟……ペエト

ヴェン

- 四、序曲 ロザムンデ……シユーベル

ト

- 五、序曲 イーゲル、ネスト

其他 シヤミネードのセレナーデ。モ

ーリス、ダンス等

「文藝座談會」に就いて

龍南の若人達がその血を沸したポートレイスを前に五月二日、文藝部は座談會を催した。座談會の主題はやはり文藝部に適はしいものにと、「近代生活と文藝」とし左のやうな順序で、先づ一通り出席者の意見が交換された。

- 一、座長挨拶

- 二、自己紹介

- 三、龍南生活との關係

一(九)一

「龍南」誌批判(各自の希望意見等)

- 四、一般生活と文藝

1 文藝と生活との關係及び文藝の生活に及ぼす影響

- 2 近代文藝の批判

近代文學の流行等に就き

- 3 文藝の伸縮(生活に基いての)

- 4 將來の豫想

- 五、結論

出席者は教授側より、八波部長、渡邊教授、竹下教授

生徒側より、河野君(文三甲三)、山上君

(文二乙)、中井君(文二乙)、入江君(文二

乙)、三橋君(文二乙)、持永君(文一甲一)

阿波田君(文一甲三)、千坂君(理二乙)、山

口君(理一甲三)

委員側より、朽葉、岩永、佐々木、桑原

大森

座長は部長の希望により委員中よりやる

ことになり朽葉君を煩はした。

豫定の順序では、自己紹介と「龍南」誌批

判は別にして置いたが、「龍南」誌批判を自